

2001年2月22日実施
『市民ボランティアとロータリアンの集い』
(シンポジウムとシャンソンの夕べ)

シンポジウムの記録

○テーマ／ フレンドシップは社会を救う

○と き／ 平成13年2月22日(木) 午後6時30分～8時

○ところ／ 前橋・東急イン2階

○シンポジスト

前橋市長 萩原弥惣治 氏

精神科医 吉野 昭男 氏

群馬テレビ常務取締役 谷村 正 氏

特養ほのぼの荘施設長 清水 秀夫 氏

コーディネーター 齋藤 浩 氏

(前橋北ロータリークラブ会長)

(NPO・前橋在宅ケアネットワークの会理事長)

司会：(拍手) 本当に有難う御座います。私、司会の前橋在宅ケアネットワークの会、澤地と申します。今日は皆様と一緒に有意義で楽しい時間を過ごしたいと思います。宜しくご協力をお願い致します。(拍手) それでは初めに開会のご挨拶を、前橋北ロータリークラブ幹事 立見丈夫様にお願い致します。

立見氏：前橋北ロータリークラブの幹事を仰せつかっております立見で御座います。一言ご挨拶をさせて頂きます。「フレンドシップは社会を救う」をメインテーマにして前橋北ロータリークラブが主催、そしてNPO前橋在宅ケアネットワークの会の協賛によりまして第一部が萩原前橋市長をお迎えしてのシンポジウム、そして第二部は「シャンソンの夕べ」という事でご案内を申し上げましたところ、一日の仕事が終わってお疲れの所にも関わらず、この様に大勢の皆様のご出席を頂きました。心より感謝を申し上げます。どうぞ最後まで皆様のご協力を宜しくお願い申しあげまして簡単に御座いますが開会のご挨拶とさせて頂きます。

(拍手)

司会：それでは本日のシンポジストの皆様をご紹介致します。前橋市長、萩原弥惣治様(拍手) どうぞ壇上の方にお上がり下さい。(拍手) 精神科医、吉野昭男様(拍手)、群馬テレビ常務取締役、谷村正様(拍手) 特養老人ホームほのぼの荘施設長、清水秀雄様(拍手) そしてコーディネーターを前橋北ロータリークラブ会長、前橋在宅ケアネットワークの会理事長、斎藤浩が勤めさせて頂きます。(拍手)

斎藤コーディネーター：お忙しい中を本当に有難う御座います。市長さんをはじめ、シンポジストの皆様、お忙しい中、ご都合をつけて下さいまして有難う御座います。このシンポジウムは前橋北ロータリークラブが主催してNPO前橋在宅ケアネットワークの会が協賛するという形で開催致しました。資料二枚目、前橋北ロータリークラブ2000～2001年、年度計画をご覧下さい。この年度の会長として私は1番「活動の指針」、2番「活動の目的と計画」、この中で何よりもフレンドシップを高める事を目標と致しました。そして年度計画として、「ロータリアンはボランティアのコーディネーターであれ」と提案し、市民も交えた討論会を開催する事を表明致しました。この年度計画は、去年の7月に出したものです。この私の考え方を前橋北ロータリークラブの皆様は良く理解して下さいまして、本日のシンポジウムを開催する運びとなりました。未曾有の少子高齢社会を迎え、現在日本人が最も求めている事は何でしょうか。私はそれは「安心」であると思います。戦後、日本が貧しかった頃には誰もが欲しいものが沢山あり、それは同じものでした。国民は同じ方向を向いて歩いていたから、お互いが良く分かり合えましたし、連帯感も持っていました。その後、ある程度物質的に豊かになって人々の望み、そして欲しいものは別々になって来ました。そして今ではお隣の人や一緒に働いている人達も、そして時には家族さえも常に話し合って自分の気持ちを伝えないと、相手の望みを聞いていないと、分かり合えない。

連帯感を共有する事も出来なくなって来ている様な気がします。不景気が続いて「寄らば大樹の陰」も頼りにならず、「何故なのか」理解できない事件も多発して、誰もが今迄の自分の価値観や常識が世界、世間に通用するものなのか、またこの先日本が、世界がどう変わって行くのか、不安で自信も無くなっています。国民の貯蓄率の高さも不安の裏返しで、それだけでは安心は買えない事も私達は良く分かっています。そこで私は不安や不信をなくし、将来の安心を得る為にはまず、身近な人達、家族や友人と話し合い、分かち合う事が大切なのではないかと考えました。話し合いの中で自分自身を見直し、自分の考えや価値観を相手に伝え、分かってもらい。相手の望みを聞いてお互いに歩み寄り、意見を刷り合わせ、違っている考えを尊重し合う。何人もの人と素直に自分を出して話し合えば思考にも考える事にも広さも深さもでき、世間の常識も感じ取られ、自分に自信が付いて来ます。そしていざという時に頼りになる友人もきっと何人かは出来るはずで。素直な気持ちで何でも話し合う間柄、これがフレンドシップであると私は思います。そして「フレンドシップは個人を救う」やがては「フレンドシップは社会を救う」事になるのではないのでしょうか。では早速今日のパネラーの一人一人に私から質問をさせていただきます。まず、フレンドシップについて伺います。市長さんはよくお話の中で「本音を話す」と言われますがフレンドシップと言うのはこの「本音で話せる間柄」の事でしょうか。

萩原市長：やはりフレンドシップと言うのは斎藤先生のおっしゃる様に「本音で話す」という事以外には無いのではないかと考えています。そして本音で話すという事は相手に対して安定、安心感を与えたいと思っています。かつて私は県議会議員時代に二つの特別養護老人ホームを設立致しました。一ヶ月に一回程度であります。それぞれの施設に理事長として巡回に行きます。そしてまず、事務所に入る前にそれぞれのお年寄りの部屋に入って参ります。そうすると、最初はそのお年寄りは「や〜、理事長さん、こんな良い施設に入れて貰って私は本当に幸せなんです」と、「本当に喜んでます」というお話をされます。そして、少し話し込んでいる内に「本当は自宅で孫や子供と一緒に生活出来るのが一番良いと思うんですね」と、これが本音なんです。そういう事を考えた場合にやはり私は、まず自分が「本音で話す」。それに対応して相手も本音で話してくれると思っています。建前論は誰でも言えますが、聞いている人は納得も安心も出来ません。人間として本音で相手にぶつかり、コミュニケーションを図る、これが本当のフレンドシップではないかという風に考えております。そこでこの際提言であります。現在、福祉関係でカタカナ用語があふれております。本当にお年寄りに理解して頂く為にこれでいいのかどうかという事を一度皆さんに考えて頂き、またいずれの場所でも皆さんの論議の対象にして頂きたいと思っております。かつて、小泉さんが厚生大臣の時に「あまりにも福祉関係はカタカナ用語が多すぎる。これを理解さして行くにはどうすればいいんだ」という提言をした事があります。その事によってなかなか密接な人間関係が出来ないという事があります。今日、それを抽出して持ってきましたが「フリーアクセス」「メディカルテック」「ライフサポートアドバイザー」「リターナブル」「ホスピルフィ」「ドクターズフィ」と

か「モデル事業」はまあ分かるとは思いますが、「ドナー」「レシピエント」「ケアプラン」「ケアマネジメント」「ケアマネージャー」「バイオセーフティ」「プライマリケア」「バリアフリー」「ノマライゼーション」と、最近これは理解されておるのが「ホームヘルパー」とか「ディサービス」「ショートステイ」「ケアハウス」「サテライト型ディサービス」とか「マニフェイスト」「プロジェクトチーム」「ワーキンググループ」「フォローアップ」「スキーム」「アカウントビリティ」「ビジョン」「コーディネイト」「カンファレンス」「スクラップアンドビルド」「ブルーデマントマンルール」ですか、これを全て皆さんがぴったと全部お答えできるかどうか。これは大変な事だと思うんであります。いちいちこれをお年寄りに解説しながらやるという事は本当のフレンドシップにはならないと。従って今後、保険福祉関係のカタカナ用語につきましては、十分皆さんと検討しながら、本音で出来るだけ理解し易い日本語で対応して行くと、いう形が良いのではないかと考えておりますので、この機会に一つの提言とさせていただきます。以上であります。

斎藤コーディネーター：有難う御座います。(拍手) 分かり易い言葉で話し合って行きましょう。吉野先生は精神科医で、吉野医院の医院長さんでいらっしゃいます。また教育委員会適正就学指導員、調停委員、特別養護老人ホーム明風園の精神科嘱託、介護保険認定審査委員、そしてNPO前橋在宅ケアネットワークの会の理事等ご活躍でいらっしゃいます。先生はフレンドシップ観をどうお持ちでしょうか。

吉野氏：はい。市長さんが今ご指摘になられた、カタカナ用語から今日は始まるという事で「フレンドシップ」、想定問答でともかくこれは今日出される問題だという事で予め英語辞典で調べて来ました。(一同笑) 英語学辞典ですね。「シップ」っていうのは接尾語でして「フレンド」と言うのは当然「友人・友達」です。「シップ」というのはその、「フレンド」を抽象したもの、つまり、友とか友人、友達、それを抽象すると何が出るか、友情とか友愛とかそういう日本語が適当だろうと思います。だからフレンドシップは今後、友愛とかそういう表現で行けるんじゃないでしょうかね。フレンドシップという言葉が最初に伺った時にこれは斎藤先生の事なんだと、何にも説明する必要はないんだと、斎藤先生の活動ぶりがまさにその源泉が、フレンドシップであろうという考え方をしておりました。でもやはりこの際、ちょっと分析する必要がありますんですけど、「パッション」＝情熱っていう様なものに対してある程度抑制的に振る舞う様な愛の形、それが友愛かな、と考えます。人間の絆の形成思考を持つ様な心のエネルギーであろうと。最近「愛は地球を救う」といういかがわしいキャッチフレーズがあります。私、いかがわしいな～と思っていましたが、やっぱり東大の惑星学の教授が「あれは幻想的な言葉で、共同幻想だ」と。人間は地球を滅ぼしてばかりいるんだからその人間の愛は地球を救うどころではないんだと言う事を指摘してました。この正月の新聞だったですかね。でも、愛は人間社会を救うと言う事は確かなようです。これなら正しいと思います。でもその人間社会を救いながら人間はやっぱり地球にお返しをする必要がある、とも思います。

斎藤コーディネーター：はい、有難う御座いました。それでは次に群馬テレビ創立以来ご活躍され、現在は群馬テレビ常務取締役として地域文化をリードされてこられました谷村さん、谷村さんのフレンドシップはどんなものでしょうか。

谷村氏：斎藤先生がコーディネーターをされるという事で私も参加させて頂きました。フレンドシップというものを考えた時に、まさに今日、前橋北ロータリークラブと前橋在宅ケアネットワークの会が合同でシンポジウムを開催された。お互いに今まではそれぞれの立場でそれぞれの活動をなさっていた会が、一緒になって考えてみよう。現実問題としては、お互いに今迄の発想とかやって来た事、経過の中で、なかなか交わらない部分があるかと思いますが、お互いがお互いの活動を理解し合うという事、そういう事によって生まれて来るもの、すなわち今後我々が果たすべき事が、そういった所で若干でも見えてくれば良い。そういう事がフレンドシップに繋がって行くんじゃないかなと思っています。私共は例えばテレビでお話するのと、会場で皆さんがいらっしゃる中でお話するのとでは全然違う訳ですね。皆さん方の反応を見て、表情を見て、表情を見てお話をします。出てくる反応で自分の話している事をどう受け止めて頂けているのかという事が分かります。ですから、相手の目を見て、表情を見ながら話す事が相手を理解する事に繋がって行くのだらうと思います。そこからやはりお互いに信頼し合う事、また、友情が生まれて来るのではないのでしょうか。最近では IT 革命でインターネットや I モードが普及しております。子供たちは会って話をする代わりにメールを交換して、本当に友達になれたと思っているのでしょうか。相手の顔も見えず、声も聞こえないメールでは、表情も声のニュアンスも分からず、言葉の後ろにある本心は伝わりません。子供たちにはお互いの信頼関係が生まれる為には、相手の目を見、表情を見て話す。相手の反応を確かめながら話す事が一番大切なことで、メール交換だけでは友情＝フレンドシップは育たないという事を教えていくべきだと思います。

斎藤コーディネーター：はい、どうも。具体的な話有り難うございます。次に清水秀夫さん。清水さんは、長年に渡って福祉の現場でご活躍され、特に伊勢崎の愛老園（特別養護老人ホーム）、寝たきりのお年寄り達を、今とは違いますからね、寝たきりになっている訳です。そのお年寄り達を皆、起こしてしまったという、これはもう大変なパワーです。現在は、ほのぼの荘という特養で現場に立っておられ、介護保険認定審査員、NPO 前橋在宅ケアネットワークの会理事もされて活躍されております。その清水さんはフレンドシップをどうお考えでしょうか。

清水氏：職業柄どうしても高齢者という視点でものを考えるという習慣が付いておまして、そういう視点からフレンドシップというものについてお話が出来たらと思っています。今、その高齢者を取り巻く環境は決して好ましい状況にはないと、現場で働いていてそう感じております。昨年からは介護保険が導入され多くの方が介護が必要になった時には「社会が面倒をみてくれる」と「社会全体が支えてくれる」という事

で期待しております。決して間違っていないのですが、では、一人一人が本当に老後を豊かに満足した状況で介護保険だけで生活出来るだろうかという事を考えた時に、決してそんなことないなあと思います。色々な制度がありますが、それは一人一人を十分満足させて、そして守るという様なものではないのではないかと考えております。部分的に大体この程度の所は守ろうというもので、一人一人の幸せ、それを具体的にその実現して行く、そういうものではないのではとっております。ですから介護保険は制度とするとなかなか良く出来ていると思いますが、これが全てでは無いとっております。そこで満足した状態をどういう風の実現して行くか、特に介護が必要になって来る、或いは高齢期になって、一人暮らしになってしまう、そういう状態の中で自分が満足をして人生の最後を送れる、そのためにはどんな事があるのかなあと思った時に、そこにフレンドシップっていうのがあるんじゃないかなと、それは満足した老後を送りたいという人達が手と手を取り合って、その時期を過ごして行くという事が理想的なんじゃないかなあと思っております。同じ考えの人達、幸せで満足した暮らし方をしたいと思う人達が、競争じゃなくて手を取り合ってという事がとっても大事なんだと思っております。最近、テレビで、地球温暖化がかなり深刻な問題なんだという事、我々あんまり実感しないんですけども、それを防止しようという事で燃料電池というものが今、話題になっております。その燃料電池の開発に、今まで競争し合ってた世界の自動車会社が手を取り合って開発にあたる。そういう動きがあるという話を聞きました。こういう例が、今まで競い合っていた人達が手を取り合う、これが正にフレンドシップじゃないかなあと感じました。自分だけが幸せならば良いと言う考え方はやっぱり違うな、自分にとっては大事な、自分は幸せになりたい、でも自分が幸せになる為には人の力を借りなければいけない。そうした時に、その人も幸せでなければいけないという気持ちを持つ事がとっても大事なんだろうなあと思っております。そんな意識を持った人達同士が手を結ぶ、その事が正にフレンドシップであろうと思っております。

斎藤コーディネーター：ありがとうございます。なかなか言いますね、みんな。(笑) 清水さん長年福祉の仕事に携わっておいでですが、私は以前清水さんが“それでも特養の世話にはなりたくねえ”と、それだけ思いを込めてやってこられた清水さんが何故そういう事をおっしゃったのか、ここでお伺いしたいのですが。

清水氏：そうですね、介護の現場にずっといます。そして今、若い職員が大勢福祉に関心を持って現場で働いております。でもその仕事振りを見ていて、何て言うんですかねえ、もの凄く不安を感じます。決められた事はやるんですね。でも、決められた仕事以外は気が付かない。例えば一例として排泄について触れますと、歳を取って働けなくなる、そのためオムツを使わなければいけない、という場面があります。いつも職員にも言ってるんですがオムツは安心の為に使うものであって、お便所じゃないんです。そこにウンチをしたり、或いはおしっこをさせるという、こんな介護っていつから生まれたんだろうなあ、って。もの凄く不思議に思ってるんです。で、お年寄

りの排泄物っていうのは、薬を飲んだりしてますので割合ゆるい場合があります。そうするとオムツの交換の時に、お尻を見ると、あの、結構毛だらけ、猫灰だらけ、お尻の周りは・・・っていうのがありますよね。正にあれなんです。それが毎日毎日、その人がいきている間中、そういう状況が続く。それを見ていて若い人は何とも思わないんですね。車椅子に座れる人達が沢山いますから、その人達をちょっとトイレへ連れて行って、トイレで用を足してやれたらそんな思いをしなくて済む訳です。けどもそういう発想が若い職員には全然生まれて来ないんです。これを「そうじゃないよ」って説明して、変えて行くのにはまだまだ時間掛かるなあと。自分が特養に入る時には間に合わないんじゃないかなあって今、私、そう思ってます。あと 20 年位すると完全にボケてオムツを使っている自分を今、イメージしているんですけども、このあと 20 年後にはまだ間に合わないかなあとと思うんですね。ですから話の中で「俺、特養で暮らしたくねえんですよ」（笑）という風に言ったんです。今、私共の施設ではその所を若い人達に、オムツっていうものはこういうものなんじゃないか、こういう状況は人間が生きていく時には異常な状態なんじゃないんかって言う事を職員に言っております。少しずつ変えてはいますが、まだ若い人達は私が言うからそういう風にやるんだらうなっていう感じがしています、彼らがきちっとそれを本当にそうなんだと思ってやって行くのにはまだまだ時間が掛かりそうだと思います。

斎藤コーディネーター：それでは谷村さん、待った無しで進行している超高齢社会の中でですね、福祉の充実を図るには、行政やボランティアの他に民間企業の出番が必要になって来ると思われますが、現実では企業と福祉の間には相当な距離感があります。おまけに長引く不況下で企業も、その存続を懸けて必死だと思いますが 21 世紀を迎えて企業が福祉に少しでも近づいて行くという、こういう変化の兆しが見えますでしょうか。

谷村氏：企業が福祉に携わろうかと考えたのはバブルの時期でした。売り上げの何パーセントとか利益の何パーセントとかのものを福祉に還元していくべきだろうと、企業は地域社会に支えられて存続している訳ですから、それにこたえる為に、そういったものも視野に入れた事を検討した時期もありました。その後バブルが崩壊してもう 10 年以上経ちますけれどもその中で企業はもう存続だけがもうポイントになってます。それだけ深刻な不況だと言えますが、やはり私は地域の皆さんに支えられて企業が存続する訳ですから、企業は金銭的にはなかなか社会還元が出来ないにしても、人材がいる訳です。その人材が、例えば地域社会の福祉に少しでも貢献できないか、有り余る労働力じゃないにしても、切りつめて行けばその時間を見いだす事は出来ると思います。例えボランティア休暇を積極的に考えている企業もありますし、少しでも地域社会に貢献する様な事も考えて行かないと私は企業の存続は難しいだろうと考えています。それが他の企業と差別化を図るっていう事で考えて行かなきゃいけない。そこで行政も国も、福祉に協力した民間企業に対して相当な評価が必要なのではと思います。企業に対して法人税の減免などの措置も考えて行くべきかなと考えます。だ

から行政と企業が上手く連携を取れなきゃいけないと思うんですね、介護保険始まって一年経とうとしておりますが色んな問題出ています。そういったものをフォローする企業がやはり増えて来ないといけないんだろうし、増やす努力を我々も媒体として行政と一緒にやって行かなければいけないんじゃないかなという風には考えております。

斎藤コーディネーター：有り難う御座いました。そういう経済状況で、吉野先生、NPO 前橋在宅ケアネットワークの会では、「ささえあい」という刊行紙を出しております。今回の号では「いきいき館構想」を提唱しております。この構想も含めましてこれから私達市民はどんな気持ちで日々を過ごして行ったら良いのでしょうか。吉野先生、お願いします。

吉野氏：はい。あの、「いきいき館構想」こそは、斎藤先生の集約的な努力目標というか、願いというか、それがもう一年余り前から我々に示されてたんですけど、どうも NPO 前橋在宅ケアネットワークの会では本格的な取り組みに至っておりません。でもその間に幾つかのそれに類似した、例えば古市のあの「憩いの家」とかですね、その他幾つかそう言った動き、もうすでに実現した動き等もあります。何故これが必要か、考えれば考える程、これは大事な事だという事が良く分かってきて、さすがに斎藤先生は時代の先を走ってるという事が良く分かりました。ともかく現在ある老人観て言うもの、それは我々自身の未来をどうも明るいものにしてないし、狭いものにしてている。そういった事がまず言えると思います。例えばアルツハイマーになる位だったら死んだ方がマシだとかボケる位ならまだ癌の方がいいとかですね、ともかくボケというのはいくらやっても徹底的に排除される。アルツハイマーも、癌も一つの老化現象と捉える事が出来ます。大まかには。ある年代に達すると、すぽっと死ぬってというのが人間の寿命でして、世界中の学者が大体同じ様な寿命の概念を発表しています。それを集約してみますと85歳、これが生き生きとして過ごして来た人がぱたっと亡くなる。直角型にカーブを墜落方向に舵をとる、そういう段階だと。標準偏差が4、という事は81～89歳、ほぼ80代ですっきりと死ぬのが人間の寿命であって運命であるんだと。それに対する心の備えは一人一人がする様にと言う事なんでしょうけども、その中にほとんどのアルツハイマーにしても癌にしても、その他の色々な原因による死亡にしても含まれているはずで、スカッと亡くなるその原因の一部をなしているに過ぎないはずで。最近この2、30年、ポックリ様というのは全国的に一番人気のあるお参りの対象で、要するに死ぬ直前まで元気に過ごしたい、それが、大部分の人達の願いな訳です。週刊朝日の介護予防読本に、PPK という言葉があるんですね。「ピンピン、コロリ」って言う様な事らしいんですけどもね。(会場笑)これはもう日本語だからいいんでしょうね。(一同笑)「ピンピン生きてコロリと死ぬ、これが願望なんですね。基本的にはこう80歳で死ぬのが当たり前、ただそれだけなんですね。それなのに不当に老年期って言うのは、何と云うか暗いものとして描かれています。病気の面からだけ老後を見ているんですね、高齢者イコール病気であるかの様

な錯覚を生みだしています。実際は、例えば5%位の方は確かに介護を要する人達です。そして20%位は若干の支援が必要な方々ですね。合わせて25%位で、残りの75%、つまり4人に3人、100人の内75人は元気なご老人です。単に元気なだけじゃなくて優秀な方が非常に多いです。で、老人は支えられなければならない、と言うそういう固定観念そのものが非常に、老年差別、老人差別の思想な訳です。その、何故そういう風な事が起こったかは医療者に責任が多かったんですが、最近、老年の医学というものが新しい成果を生みだして来ました。その幾つかに触れてみますと例えば、性格変化ですね、歳を取ると頑固になって猜疑心が強くてロクな事は無いという風に言われます。その性格変化をする人を良く見ますと必ず脳の病気があります。例えば脳腫瘍にしても脳の委縮性の病気にしてもですね、いずれにしても脳に重大な病気が始まる時に性格変化が起こる訳です。つまり痴呆も始まりの時に性格の変化が起こる。だから性格変化っていうのが老人になると起こるんじゃないんです。病気が起こるだけです。それは当り前のことです。それから老年になって衰える能力とは一体何か、良く分析してみると物の判断力とかは概念の操作とか、そういう判断力は結晶性能力といいます、それは益々伸びるんですね。(一同笑) 衰えるのは何かって言うと流動性能力です。手続き能力とか動作性能力です。どんな名選手でも野球の選手は、30代で大体引退してます。長嶋も川上も王もみんなそうでした。判断力や概念の操作など言語性結晶性能力は伸びる一方です。特に優秀老人にとっては70、80以降こそ対策を生み出すチャンスになる訳ですね。要するに総合的能力は死の直前になって初めて急速に低下する訳です。それが終末低下とか直角型の老化とか言って、これがさっきあの、すぱっとみんなが死ぬと言う事になります。現在は障害を持った高齢者の増加という事を予測することのみ、汲々としている、そういう傾向があります。しかし、先程も言いました様に、健全な高齢者が75%いるんです。今、登校拒否、ひきこもりなどが若い人に増えてます。本当に元気で学校にいきいきとして行っている人が75%以上いるのでしょうかね。全部同じ現象なのにあたかも老年期にだけそういう問題があるかの様に誤解されています。で、高齢者は他の世代に支えられるのではなくて自助能力を当然持っております。その場さえ与えられれば社会にいくらでも貢献できる優秀な人材が豊富な訳ですね。もし、高齢社会が破滅に向かうとすればそれはこういった優秀な高齢者の能力を活用出来ない施策の貧困によるものだと思います。最近辿り着いた幾つかの老年医学の成果を元に、当然取り込まなければいけないNPO前橋在宅ケアネットワークの会の課題としてこの「いきいき館構想」はあると思います。「これは下宿屋さんという風に考えたらいんじゃないか」と斎藤先生は仰っています。この意味する所をまとめてみますと、まずその一つは孤立の解消という事ですね。孤立という事は閉じこもりを招きます。若者の引きこもりと同じ現象として高齢者にもこれはある訳です。人と一緒じゃなければ生きられないという面と一人でなければ生きられないというその両方を人間は持っていると思います。一人でこそ生きられる面、例えば、創造する、色々な形でじっくりとこう、詞を作る、短歌や自叙伝をまとめる、経典を読む、哲学、或いはバイブルを紐解く、一人でなければ、静かな所でなければやれない事っていうのは一杯あ

りますし、現実にはそういう事を沢山の方がなさってます。いずれにしてもそういう方は病気になる訳はないので、病気になりそうな籠もり方をしている人、孤独している人、そういう方を誘い出す、これは大事な事だと思います。

二番目として、人間同士が交わると、さっきのフレンドシップによって自分自身の世界が広がっていく、自己変革とか自己変容、そして結局それが自己実現っていう可能性を広げると思うんですね。そういうことが二番目。

三番目は、そうやって集っていると情報基地としても利用出来るだろうと。つまり発信する、受信する、両方の情報基地です。色々な施設、他の所へ色々な発信基地としてみんなでそこを使えば良いし、仲間でお金払わなくても教えてくれる人いっぱいいますから、一緒に勉強してインターネットを活用する。シルバー人材センターからの求人を待つ、或いは求人を開拓する為に色々な所にアプローチしてみる。この為の情報基地としたい。それが三点。

それから四番目としては……………プロダクティビティという言葉です。これは老年研究を一生懸命やっている人達もついに日本語に直せないと、「今の所我慢してくれ」と言っているプロダクティビティ。プロダクティブ・アクティビティの省略と考えたら良いと思います。要するに生産的能力です。或いは能動的な自発的な能力、社会参加能力。プロダクティブベイビュアーですね。有償労働、無償労働、ボランティア活動、相互扶助、保健活動など。保健活動というのは自分の健康を維持増進して行く為に、その為の講師を招いたり、色々な格好の活動をして行く、そういった内容を含めます。それらを全てやって行く、それが老人の生活を豊かにする内容な訳ですが、その互助機能を中心としたあり方、それを四番目としてみました。

五番目は生活の質の向上、盛んに QOL といわれますね、quality of life、生活の質です。その質を良くする為に食育、体育、知育があります。食事に関する色々な教育、自己教育、他者教育、お互いに調理を学んだり、栄養学を学んだり、体育、斎藤先生に色々教えて貰うとか。知育、知育の教授はいっぱいあります。在宅ケアのメンバーの人達、或いは医師部会の方々がこの辺では大活躍して頂けると思います。それと環境改善。なかなか自宅ではやれない様な事も共同住宅、5人～9人位を対象と言う事ですけども、バリアフリーは当然として、色々な改善が出来るだろうと。お金の補助もありそうだと。

六番目がセーフティネットとして数人で集まっているという事はとてもいいですね。悪徳商事、商法の人達に対しても一人一人だと弱いですけど、みんなで嘘を見抜けますしね。みんな一緒にいればそういうものを撃退出来ます。(一同笑)後は急病が起きた時の互助、連絡、そういう事はとても有利ですし、安心です。

七番目としてそういう環境に於いては痴呆も早期発見され易いです。でも早期発見されたからと言って、どこかへ遠ざけるのではなく、仲間としてそこで長く頑張っていると思います。こういった事を通して介護を受ける必要のない状態を維持してそれを増進していく、それが介護予防の基本だと考えます。先程、清水さんがドイツの保険状態、介護保険状況を見てきて、確かめたんですけど、ドイツでは18歳から介護保険を払ってます。当然だと思います。選挙権を行使する。その年齢から保険料を払

う訳です。さらにその前から、人生の意味とかそう言ったものを親子、社会全体で考えて行く、その結論的な部分としてこういう、高齢者がいきいきと過ごせる場があるんだと、貢献できる場がある。そして高齢者は自分がお返し出来ない様な援助を受けるといふ事はとても苦しいんですね。介護保険で要介護に認定されても四割くらいしか利用されていない。あれは負担金が足りないからだという風に一方的に解釈しています。でも、「お返しが出来ない事は嫌だ」といふ人が実際には凄く多い訳ですね。一方的な援助を望む人は誰もおりません。そしてこれでもか、これでもか、と援助をすれば絶対に弱る一方です。無能化が進む一方です。酸素が必要だからといって酸素をやりすぎたら必ず死にます。これは、呼吸する力が落ちますから。過剰な援助は、要するに過保護な親と同じくらい駄目で過保護な親は子供を駄目にして、家庭内暴力でちゃんとひっくり返されますけれども。老人の主体性といふか能力、それに期待して行くことが「いきいき館構想」の根本になるんじゃないかと思えます。

斎藤コーディネーター：有り難うございました。市長さんにお伺いします。これから市民の暮らしには行政と医療、福祉、そして企業の協力が、協力し合う事が、キープポイントだと思います。それで市長さんにお伺いしますがこれからの福祉について一言お願い致します。

萩原市長：これからの福祉についてという事ではありますが、まず一つ、少子高齢化と言う形が大変叫ばれております。特に少子化対策については、今、深刻な問題であります。人口減対策として色々な住宅団地やら、作っております。子供を育てるなら前橋で、と言われておりますが、私は一期目には一歳づつ年齢を上げまして就学前の医療費、これはすでに所得に関係なく無料であります。入院、通院に限らず前橋は、無料化を図っております。若いお母さん方に対する一つの支援策であります。そして、この議会で提言致しますのは、三人目以降のお子さん、保育園、幼稚園のお子さんにつきましては、授業料、そして保育料の免除を行います。これも大変な額ではありますけれども、これも安心して前橋で子育てが出来る様に対応策を取っております。「いきいき館構想」とは違った面で非常にユニークな人口減対策を進めております。フレンドシップに関連致しまして、私、いつも申し上げるんでありますが、差別の心があってはいけない、障害者の面倒を見てやるんだという気持ちでは駄目な訳であります。従って率直に、対等な立場で何でもお話をする、同情の心を持って接したのではこれは、差別が生まれてる訳です。あくまでも対等に障害者の方とは接して頂く、これも障害者に対する福祉の大きな前提ではないかという風に考えております。基本的には、お年寄りの方の姿勢だと思います。それは前橋で友好都市しております、アメリカのバーミングハムのサミュエル・ウルマンという詩人が“青春”という詩を書いております。前橋の文学館の前にその記念碑が建っておるのはご承知だと思うんであります。「19歳、20歳であっても目的のない人生は青春では無い」ということでもあります。「80歳、90歳であっても一つの目的を持っておれば、それが青春であり、生涯現役なんだ」と、この様な姿勢の問題でありますからこれからのお年寄り

に對しましては歳ではなく、精神年齢で行きましょう、と。そういう姿勢があることによつて私は健全なお年寄りの生活が出来ているのではないかと。また、そうでなければならぬと。心の豊かさと精神の持ち方だという風に私は思つております。そういう中で最小の経費で最大の効果をあげられる様な施策をこれからも多くの皆さんと検討しながら、そして知恵を拝聴しながら行政として進めて行きたいというのが市長としての考え方でありまふ。今後ともいろいろなご提言、率直なご意見、ご示唆を頂ければ有り難いという風に思つております。以上であります。(拍手)

斎藤コーディネーター：有り難うございました。最後に私の一言をお聞き頂きたいと思ひます。私は内科の開業医で御座います。私は医療が細分化される中で開業医がどうしたら患者さんの役に立つ事が出来るか考え続けて色んな事を試みて来ました。10年程前に患者さんとはとにかく主治医として友達になろう、そう考えつきました。それは、私が悩み続けてきた中での発想の転換でした。以来、そして多分これからもしばらくは開業医を続ける事が出来る、そんな自信も少し出ました。前橋北ロータリークラブの会長になる事は私自身、考えてもいかなかった事で御座います。先輩のお一人に「忙しいでしょうが、先生は今が旬なんですよ」と言われて会長をさせて頂く気になりました。この任期もすでに2/3を過ぎようとしています。でもこうして短い期間に多くの友達と触れ合い、市長さんとは友達ですよ。(一同笑)

萩原市長：私の主治医ですから。(一同笑)

斎藤コーディネーター：本音で話し合い、フレンドシップを築けた事を心より感謝する気持ちでいっぱいです。本日は皆さん、有難う御座いました。(拍手)

司会：それではシンポジウムの終わりにあたりまして、前橋北ロータリークラブ副会長養田功様より一言ご挨拶頂きます。

養田氏：養田で御座います。長時間に渡りましてシンポジストの先生方には大変有り難う御座いました。大変有意義なお話を聞く事が出来ました。またこれからの人生の指針を得た思いで御座います。本当に有り難う御座いました。それではこれにて前橋北ロータリークラブ主催、そしてNPO前橋在宅ケアネットワークの会協賛のシンポジウムを終わらせて頂きます。どうも有り難う御座いました。(拍手)

司会：それでは10分間の休息を挟みまして、第二部 今井チヅコさんのシャンソンの引き語りをお楽しみ頂きます。